［45］

氏　　名	嶋　田　宏　司（しま だ ひろ し）
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学　位　記　番　号	博第 480 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学　位　論　文　題　目	オーストリアとドイツにおける近代芸術の展開 ユーゲントシュティール、表現主義からダダイズムにいたる人間像の表現
論　文　審　査　委　員	主　査　教　授　宇佐美　幸　彦 副　査　教　授　浜　本　隆　志 副　査　教　授　中　谷　伸　生 副　査　教　授　ローベルト・F・ヴィットカンプ

論 文 内 容 の 要 旨

本論文においては、２０世紀へと移り行く世紀転換期にオーストリア、ウィーンで広まった新たな様式芸術であるユーゲントシュティールの代表者グスタフ・クリムトに始まり、その様式を引き継ぎながらもやがてその拘束性を打ち破り、独自の表現主義を確立していったエゴン・シーレとオスカー・ココシュカの制作について作品観察と考察が行われている。これに続き、この３人からはやや遅れて登場した、ドイツ、ハノーファーのダダイスト、クルト・シュヴィッタースの作品に関する考察がなされている。

表現主義とダダイズムにおける人間イメージは極端な形式で表現されている。本論文では、それ以前の表現規範から自由であろうとし、知的かつ機智に富んだ表現を求めるモダニズム芸術の展開において、人間像が作家の構想の中でいかに存在するのか、また作家にとっていかなる意義を有しているのかということについて、各美術傾向を対比させて明らかにする試みがなされている。

本論文は 4 人の芸術家のそれぞれの作風の変化に注目している。個別研究の概要は以下の通りである。

（1）グスタフ・クリムトは、当初外国から流入した象徴主義、アール・ヌーヴォー、そしてアーツ・アンド・クラフツの新しい装飾的な様式美に適合するよう、人物像の輪郭を暢達な描線で描き、ポーズにおいても定型の画面内に納まるよう工夫を凝らした。その後、印象派、ポスト印象派、さらに台頭してきた若い世代の絵画にも刺激され、彼の筆は工芸的な仕上げを示さなくなる。後期に制作された女性肖像画群は、筆の動きが自在になり、荒い筆跡を残すメチエを示す。そして、バックに施した装飾パターンと人物のまとう衣服の柄とを連続させ、あるいは色の塗り方によって像とバックとの境界を払い、描かれた女性が画中の空想的な世界にたたずむかのごときイメージを提示することができた。

（2）エゴン・シーレの研究では男女一対の抱擁を示す像が取り上げられている。シーレは絵画によって人間のエロスの探求を試みており、異性の組み合わせである二重像が、彼の創作の本

質や人間観を代表していると考えられる。しかしモデルとの関係の変化とともに作風にも変化が見られる。すなわち、初期においてはクリムトの技法を応用して、平らな幾何学的形式に人体部分を接続する方法が特徴であったが、やがて人体を写実的に捉えながらも、線描に工夫を凝らして押しつぶすように絵画平面に埋め込むという、緊張感のある表現へと変化した。そして最後には、やや弛緩した輪郭を示す写実主義へと変わる。

（３）オスカー・ココシュカについては、彼独自の表現主義の解明が試みられている。つまり初期肖像画の成立、原始美術を受容したデザイン・イラストレーションから表現主義的描法への展開、そして幻視を通して眺められた都市の景観図が論じられている。ココシュカの初期肖像画の制作はあくまでもモデルとなる人物の観察にもとづくが､単なる容姿や外見の模写に陥らない。筆を持つ彼の手の動きは、人物の生き様に寄せる同感に促されて、内面性を表出するデフォルマッションを行う。表面の掻き落としなどの独自の方法で、非物質的な発光を表現し、肉体の重量を感じさせない、人間の霊性を幻視によって出現させる、彼の表現主義が成立した。ココシュカの風景画は、旅行で訪れた都市を高所から眺め渡すという特徴を有している。彼は単に自然の眺望を描写するのではなく、歴史が刻まれたヨーロッパおよびその縁が深い都市をヨーロッパ人として観察することを、このジャンルにおける課題とした。

（４）クルト・シュヴィッタースの制作については、「メルツ」（Merz）と名付け始めた初期の作品群において主題内容の解釈について検討され、次に彼が執筆した多くのメルツ創作論を整理して、メルツ絵画の画面構成法が考察されている。そして美術のみならず文学にも及ぶ、彼の創作全般に鳥モティーフが登場することに着目し、その特殊な意味と彼の創作における着想のあり方が論じられている。シュヴィッタースの初期の制作は、イタリア未来派に影響されている。未来派の「力線」による空間を通過する動きの表現は、シュヴィッタースの作品では、ヴォリュームとなる円で充填する抽象幾何学形式の構成へと変質する。これに加えてコラージュ、アッサンブラージュの契機となるのが、第一次世界大戦のドイツ敗戦であった。彼は瓦礫を材料にしてメルツ絵画の構成材となすが、その直前期の抽象形式をなぞるように廃材を配置する。シュヴィッタース自身は、素材が元来有していた意味（あるいは機能）を廃して画面に貼付すると言うものの、同時期に描かれた抽象の油彩画には人間の動作を表すような題名が付けられており、漫画的な素描には抽象形式に人名を当てている。シュヴィッタースによる表現の究極は、円盤をもって人と見なすやり方である。それは抽象的形式の恣意的な解釈の仕方であり、物に対して偏執的に想像を擦り付ける、質朴なフェティシズムでもある。以上の考察から、オーストリア出身の３人に対して、シュヴィッタースが全く異なる人間像の観念を抱いていたことが明らかであると、本論文は指摘する。

本論文で取り上げられた４人は、活躍の時期と場所が近接している（とくにココシュカとシュヴィッタースは相前後して、ベルリンで同じ新傾向の芸術に触れ、さらに同じ芸術誌にエッセイや文学作品を投稿し、作品図版が掲載されている)。この４人の芸術作品を通時的・共時的に観察し、比較した結果、人間像の表現において大きな相違があると本論文は論ずる。オーストリア出身の３人は、精神性や内面の表出を目指して極端な描写を試みるものの、通常の人間の姿、ないしは描写すべき人体形式が、作家の構想の中に厳然と存在する。これに対し、ドイツのシュヴィッタースの場合は人体形式を念頭に置かず、歯車などに人名を当てて、それらを結ぶ線によって人間関係を表示するという、エキセントリックな表現への展開が観察されると本論文は指摘している。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

芸術における人間像を考察するときに、社会的な背景抜きで論を展開することは困難である。嶋田氏の研究分野はドイツの芸術史であり、美学の分野とドイツ文化論の両分野をまたぐものである。グスタフ・クリムト、エゴン・シーレ、オスカー・ココシュカ、クルト・シュヴィッタースなどの芸術家に関する研究は、ユーゲントシュティールからダダイズムにいたる芸術理念と現代文化の方向性を検証するもので、ドイツ学の分野においては非常に重要な位置を占めている。嶋田氏は、これらの芸術家が活動の基盤としたウィーン、ハノーファー、ベルリンという都市の急激な変動と芸術家の創作との関連を重視している。

嶋田氏は、フリッツ・ノヴォトニーの主張を受けて、クリムトこそが自然主義（および後期印象主義）から離反する芸術家のリーダーであると位置づける。クリムト、シーレ、ココシュカというウィーン出身の 3 人の芸術家は､感情や情緒の面で強い表出によって人物像の内面を表現し、表現形式においてもウィーンで栄えていた装飾美術をさらに独自に発展させた、と本論文では指摘している。一方、ドイツのクルト・シュヴィッタースは、第一次世界大戦直後のドイツで、革命と称してゴミくず同様の紙や板の切れ端、廃棄された日用品の中から、画面構成に有効な形式を見出し、構成主義的な作品を生み出した。本論文でもっとも重要なテーゼとなっている問題意識は、20 世紀初頭のモダン芸術で、古い型を脱した人間像の表現がどのように典型例として表れているかということである。嶋田氏のまとめによると、それは、クリムトでは図柄に埋もれ、同化する婦人像であり、シーレでは抽象形式に接続され、より大きな構図に押し込められる人体であり、ココシュカでは絵具層を掻き落して、発光する身体を持つ肖像人物や、振動的なタッチで建造物群を掴む都市景観の描写であり、そしてシュヴィッタースでは、身体形式すら持たない、生命あるものとしてのイメージである。

審査委員からの指摘として、4 名の芸術家の比較のみで、オーストリアとドイツとの芸術傾向の違いまで結論付けることが可能かどうかという意見があった。すなわちドイツの表現主義芸術家の多くもオーストリア出身のシーレやココシュカと同じく内面的な精神性を重視しているのではないか、またシュヴィッタースの形式破壊の方向は、ドイツ以外のダダイズム芸術家の傾向としても広く展開されたのではないか、という疑問である。この点に関しては、4 名という少ない事例ではあまり結論を急ぐべきではないことは当然であろう。他の多くの芸術家の分析をさらに展開し、論を補強することが嶋田氏の今後の課題であろう。しかし本論文の大きな意義は、4 名の芸術家の作風の変化をきわめて具体的に解明したことである。クリムトの後期の肖像画が、クリムト独自の装飾的な様式を抑え、内面的な方向へ移行した点、シーレやココシュカがクリムト的なオーストリアの工房から抜け出し、独自の題材や技法により、内面的な画風へと変容する過程、シュヴィッタースが未来派的な技法を応用し、独自の線描やコラージュを開発していく変化を、嶋田氏がそれぞれ具体的な作品に即して緻密に解説した点は高く評価することができる。とりわけシュヴィッタースに関しては、日本ではほとんど先行研究がなく、ドイツ語や英語の文献を駆使した嶋田氏の考察は日本における本格的なシュヴィッタース研究の開始を示すものとして大いに評価できるであろう。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。